

間 1.1 年)。1 次アウトカムの脳卒中・全身性塞栓症の初回発生は、アスピリン群で 113 例(3.6%/年)、Apixaban 群では 51 例(1.6%/年)であった(ハザード比 0.45)。一方、死亡率、大出血の有意な増加は認めなかった。著者らは本結果より、Apixaban はワルファリン治療が適さない心房細動患者において出血リスクを増加させることなく塞栓症リスクを低下すると結論した。本邦でも RE-LY 試験でワルファリンに対する非劣性、安全性が示された直接トロンビン阻害剤ダビガトランがいよいよ発売となり、抗凝固療法は今、変革の時期を迎えている。

遺伝学的メタ解析による CRP 濃度と冠動脈疾患の因果関係の検討

C reactive Protein Coronary Heart Disease Genetics Collaboration (CCGC): Association between C reactive protein and coronary heart disease: mendelian randomisation analysis based on individual participant data. BMJ 2011; 342: d548.

血中 CRP 濃度は冠動脈疾患リスクと相関することが報告されている。本研究は CRP 濃度自体が冠動脈疾患の原因因子であるか否かヒト遺伝子多型を用いて検討した。15 カ国 47 件の疫学研究より冠動脈疾患患者 46,557 人を含む 194,418 人のデータを収集し、メンデル無作為化メタアナリシスを行った。CRP 遺伝子の 4 つの一塩基多型(SNP)を検討した結果、個々の SNP と CRP 濃度は最大で 30%関連していたが冠動脈疾患のリスク比との有意な関連は認めなかった。また、複合解析でも遺伝学的に CRP の自然対数濃度が 1SD 上昇した場合の冠動脈疾患のリスク比は 1.00 であった。著者らは、ヒト遺伝子解析の結果では CRP 濃度自体は冠動脈疾患の原因因子ではないようであると結論しており、CRP は冠動脈疾患の単なるマーカーであることが示唆される。

(九州大学大学院医学研究院先端心血管治療学講座
北本 史朗)